

読解教材を刺激とした留学生の発想

—日本人との接触や日本体験はどのような影響を与えているか—

What international students conceive from reading materials about Japan: influences
of contact with Japanese people and experiences of Japan

丸山千歌 (立教大学)・小澤伊久美 (国際基督教大学)

MARUYAMA, Chika (Rikkyo Univesersity)

OZAWA, Ikumi (International Christian University)

1. はじめに

日本語教育において、日本語学習者の関心が日本社会・日本文化に向いていることが多いことから、書き下ろし教材にしても生教材にしても日本社会や文化関係の題材を用いることが多いが、ステレオタイプの情報日本語学習者への影響についての議論は教材論や授業実践論に発展するまでには至っていないという現実がある。これをふまえ、教材論や授業実践論に立脚した、より幅と深まりのある日本語教育を実現させるには、学習者がステレオタイプの極端な情報が盛り込まれた日本語教材によってどのような影響を受けるのか、また、実際にステレオタイプの日本像が描かれた教材を扱う場合、教師はどのように授業を展開すればいいのかといった問いに対する指針作りを視野に入れた研究が必要になり、それには学習者がどのように読解教材と向き合っているかを細かに見る必要がある。

このような背景から発表者らは、学習者個人と教材のインタラクションの解明を目的に、信頼性の高い質的調査の手法である **Personal Attitude Construct** 分析法 (個人別態度構造、PAC 分析法) を用いて、日本語学習者がステレオタイプの読解教材を読んだ場合、どのような影響を受けるのか、またその影響は学習者の属性、留学体験といかに関わるのかを縦断的に調査している (丸山 2007、丸山・小澤 2011a、丸山・小澤 2011b 他)。

留学体験が日本語学習者に与える影響に関する先行研究では、居住形態の違いが狭義の意味の日本語力向上との関係から調査されている (姫野・佐藤 2012 他) が、本研究では単なる居住形態の違いでなく、日本人との接触や日本体験のありようを見て、読解教材から発想するイメージの相違を質的に分析している点、さらに個人差が大きく、統制をかけた調査をしにくい中級レベルの学習者を対象に、個人の変容に着眼した質的研究でありつつも同一要素を持つ調査協力者複数の事例を扱っており、比較が可能であるという点に本研究の意義がある。

本発表は、この一連の調査のうち、2012年3月から2013年3月にかけて実施

した、英国からの留学生の留学前と留学中のインタビューデータについて考察する¹。

2. PAC 分析法とは何か

本節では、丸山・小澤 (2012) に基づき、PAC 分析法について簡単に説明する。PAC 分析法は社会心理学と臨床心理学の両方の知見を持つ内藤 (2002) によって開発された研究手法で、まず、ある刺激に関して自由連想をさせ、連想語同士の類似度を評定させた結果をクラスター分析にかけ、デンドログラム (樹形図) を作成する。そして、そのデンドログラムを元にインタビューを行って調査協力者自身によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、調査者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を分析するという方法である。この手法には以下の3つの特徴がある。

第一に「自由連想」である。PAC 分析法では、調査協力者は渡されたカードに自由に語や文を書く。アンケート調査は調査項目があらかじめ設定されており、従来のインタビュー調査も調査者が質問内容をあらかじめ設定してインタビューの流れを作るので、どちらも調査者主体で実施されると言える。しかし、PAC 分析法の場合は、調査者が作成し提示する刺激が自由連想に影響を与えるものの、インタビューの元となる連想語は調査協力者の自由連想によって出されるため、調査協力者は調査者の想定しなかった項目も提示することが可能であり、アンケートや従来のインタビュー調査と比べると調査項目の設定の自由度が格段に高いと言える。

次に、「連想間の類似度の評定」である。これは調査協力者がカードに書いた語や文の直感的なイメージ上の距離 (意味的に近い・遠い) を数値化することを指す。この情報をもとに、クラスター分析という統計的手法によってデンドログラムを作成し、それを見ながら語ってもらうため、調査協力者の語りが自由連想で引き出されたことから恣意的に逸脱するなどの操作が制限でき、データの客観性が高まる。

3点目に「調査協力者自身によるクラスター構造のイメージや解釈の報告」があげられる。調査協力者は、カードに書いた語や文の感覚的な距離の情報に基づいてできた上述のデンドログラムを見て、そこに現れた調査協力者自身があげた語のまとまり (クラスター) を見ながら、イメージや解釈を報告する。つまり、連想語が並んだデンドログラムからイメージなどを想起する段階でも、調査者協力者の主体的な関与を求めているのである。

このように見ると、PAC 分析法は、3つのどの点においても調査協力者が中心となって進められることがわかる。

PAC 分析法の調査協力者は基本的に 1 名で「PAC の手続きの中で、デンドログラムに基づく面接が大部分を占める」(末田 2001 : 59) ので質的研究だと言えるが、調査協力者があげた自由連想項目同士のイメージ上の近さや遠さに基づいてクラスター分析を行うという意味で、PAC 分析法は量的な調査の特徴がある。また、調査協力者による内省報告は、デンドログラムによりコントロールされているので、再現性が高く、安定的となる。同じデンドログラムから出発して、再現性が高いということは、単独での信頼性の高さだけでなく、相互関連的な信頼性も高いことになる(末田 2001 : 74)。さらに、調査協力者によるイメージや解釈はデータの一つとして扱われ、調査者はそのデータに加えて、連想語の重要順、プラスマイナスのイメージ、研究課題(リサーチクエスション)に関連のある分野の最新の理論などを鑑みて総合的な解釈を試みることとされている。

以上から、PAC 分析法が、調査協力者の感覚的で自由な発想への制限を可能なかぎり外した、調査協力者が主体となる手法であると同時に、客観性・再現性が高い質的研究の手法であり、事例的研究を理論へと発展させる可能性を持った手法であることが期待できる。

3. 調査

3.1 調査協力者

調査協力者は、英国からの 1 年の交換留学生(女性) A と B の 2 名である。2 名とも専攻は日本語と経営学で、二人の日本語学習歴はインタビュー開始時において、大学で 1 年半(週 10 時間)、日本語力は中級前半であり、今回の留学が初めての滞日経験となる点も共通しているが、A は英国出身の学生で、B はヨーロッパ圏から英国への留学生であり、A にとっては日本が初めての留学経験となり、B にとって日本は 2 つめの留学経験となる点が異なる。現在 2 名とも日本でも同じ大学に通い、同じ寮に滞在し、同じ日本語クラスを受講している。

3.2 調査の手続き

調査は短期留学プログラム約半年前の 2012 年 3 月と短期留学プログラム開始から約半年後の 2013 年 3 月に、研究室で筆者らが実施した。調査時間はそれぞれ約 4-5 時間、そのうちインタビューに要した時間は 1-2 時間である。PAC の手続きに従い調査協力者のイメージを分析し、調査協力者がテキストを刺激として発想するものを明らかにするという目的で調査を進めた。調査は調査協力者の許可を得て、IC レコーダーに録音した。使用言語は、本来は調査協力者が思っていることが自由に表現できるよう母語で行うことが適切であるとされている¹¹が、今回は本人の希望により状況に応じて使用言語を選択することとした。その結果、

留学前（プログラム開始前）調査では、英語が主に使用され、留学中の調査では主に日本語が使用された。

調査協力者が踏んだ手順は丸山（2007）と基本的に同様であるⁱⁱⁱ。本研究のPACインタビューと一般的なPACインタビューの相違点は、本研究が刺激する読解教材を用意する点にある。刺激とする読解教材の選定にあたっては、本稿が、読解教材が学習者に与える影響を観察することを目的とすることから、観察しやすさを優先しつつ、ステレオタイプ性の高い内容のテキストを、刺激とする読解文に採用することを基本方針とした。ステレオタイプ性の強さについては、筆者らの主観的判断を排除するため、日本人の日本語教師10名に（1）日本や日本人についてのステレオタイプ的な要素が含まれていると思うか、（2）含まれていると思う場合、どのようなステレオタイプかの観点から、複数の読解教材を評価してもらい、その結果を活用して、筆者ら2名が、日本語のレベル、教材の普及度を加味し選定した（丸山・小澤 2011a）。今回の調査では、調査協力者が留学前、留学中と同じ読解教材をもとにPACインタビューを行う点が新しい試みとなっている。本調査で調査協力者が選んだのは、石川他（1993）『日本語 2nd ステップ』の第19課の「酒」である^{iv}。

連想刺激文は筆者ら2名で検討し作成したもので、「これは外国人のための日本語の教科書です。あなたはこの文章に書かれている日本について、どう感じましたか。あなたの感じたことを、言葉やイメージで表してください。書く時には思いついた順に、順位の番号をつけてください。」である。

3.3 日本に関するモノゴトとの接触状況-フェイスシートの情報から-

本研究では、丸山・小澤（2008）に基づき、日本に関するモノゴトとの接触状況についての質問を加えたフェイスシートを使用し、PACインタビューの休憩時間を利用してフェイスシートへの記入を依頼した。質問項目は、留学前と留学中とで日本・日本人に関する情報へのアクセスの経路、頻度、情報の内容の変化を追うことを目的とし、具体的には、メディア（新聞・雑誌・インターネット・TV・その他）、人間（家族・友だち・教師・その他）、日本語のクラスへのアクセスの頻度、重要度（重要<5>から重要ではない<1>の5段階評価）を尋ねた。その結果が表1である。また、そのフェイスシートを見ながらその場で補足質問的なインタビューを行った。

表1 日本に関するモノゴトとの接触状況について

調査協力者	留学前		留学中	
	アクセス頻度 (接触対象)	重要度	アクセス頻度 (接触対象)	重要度

A	メディア： 新聞・雑誌・インターネット・ TV・その他	週 5 回程度 (インターネット)	4	1 日 5 回程度 (TV・映画・音楽)	4
	人間： 家族・友達・教師・その他	毎日 (大学に留学中の日本人学生と直接)	4	1 日 5 回程度 (友達・教師:直接、 英国の大学で知り合 った日本人学生と Facebook で)	5
	日本語のクラス	週 5 回程度	5	週 2 回程度	5
B	メディア： 新聞・雑誌・インターネット・ TV・その他	週 4-5 回程度 (イン ターネット)	5	1 日に 1 回程度 (Facebook)	3
	人間： 家族・友達・教師・その他	週 2 回程度 (教師大 学に留学中の日本人 学生と直接)	4	1 日に 2-3 回 (留学先の大学の国 際交流サークル、寮 の日本人学生)	5
	日本語のクラス	週 2-3 回程度	5	週 3 回程度	4

表 1 を見てわかるように、A も B も留学前からメディア、人間、日本語のクラスで積極的に日本・日本人へアクセスしており、本人にとっての重要度も 5 段階評価で 4-5 と積極的に評価している。留学中は 2 名にとっての日本人との接触に対する重要度が高くなっている。フェイスシートに基づくインタビューからは、A は留学前に送り出し校で友人になった日本人留学生と日本でも会い、留学先の大学でも国際交流サークルなどを介して日本人学生との交友関係を広げていることがわかった。B も国際交流サークルを介して日本人学生との交友関係を広げており、さらに空手部に積極的に参加している。空手部は部員は多いものの通常集まるメンバーは B を含め 6 名と小規模で、B は初心者であるが、週 4 日できるだけ練習に出るようにしている。このように A と B はそれぞれのスタイルで日本・日本人と積極的に関わっている。

4. 結果と分析 —連想語を中心に—

A の連想語 (留学前)

Cluster	重要度	連想語	
CL1:Drinking after work	14	It's common to drink alcohol after work.	0
	15	It makes me want to go out to the pub again.	+
	7	People's lives at work and their home lives blend into one.	-
	1	There is a culture of drinking with colleagues from work.	0
	6	If people reject an invitation to go out drinking, they will feel bad about it the next day.	-
	9	People feel forced to drink alcohol	-

	13	People should not reject or refuse to go drinking when they've been invited.	-
	3	I don't see how people can go out all of the time and keep up with work and assignments.	-
CL2:Downsides to drinking alcohol	8	After drinking alcohol people then feel like they can do anything they want to.	-
	16	People drink or drive after drinking alcohol.	-
CL3:Socializing with alcohol	11	It makes me think of going out for birthday and not being able to go to lectures the next day because I was ill.	-
	12	It reminds of goint out with my Uni friends to the pub to drink, even though I had a 9am lecture the next morning.	-
	10	I want to go out and drink with my friend even though I Know it will cause stress for me at uni.	-
	4	The more I thin about drinking the more nausous I feel.	-
	5	People are often hung over after goint out to drink.	-
	2	More and more, the trend of drinking after work is decreasing.	0

A の連想語 (留学中)

Cluster	重要度	連想語	
CL1:イギリスのお酒	21	イギリスとくらべて、日本のお酒のぶつか(prices)は高いです。	-
	24	イギリスに安いお酒がたくさんありますが日本で安いお酒あまり見てません。安いお酒⇒cheap versions e.g. smirnoff vodka, tesco vodka	-
	15	日本のいざかやとイギリスのパブ(pub)はとても違います。	0
	20	日本のお酒とイギリスのお酒は違います。	0
	14	お酒を飲むイギリス人はとてもうるさいです(loud/rowdy)。お酒を飲む日本人はそんなにうるさくないです。	+
	9	日本はお酒を飲むしゅんかんがあるのに、私は日本にお酒をあまり飲みません。	+
	23	忘年会の時、私はお酒をあまり飲みませんでした。	0
CL2:あぶないです	19	酔うのはあぶないです。(Being drunk is dangerous)	-
	22	日本人はお酒が弱いです。	+
	6	イギリスでお酒を買う時、若い人はいつも Identification を見せさせています(are made to show I.D.)。	0
	17	ふつかよい(hungover)日本人を見たことはありません。	+
	18	日本に次の朝吐き気などがしないために、薬がたくさんあります。	+
	12	イギリスとくらべて、レストランやいざかやに飲みほうだいがたくさんあります。	+
	13	日本にカラオケやクラブに5時までお酒を飲みます。イギリスで、これを出来ません。	+
CL3:仕事のお酒	1	日本人の仕事はストレスがたくさんあるので、お酒を飲みます。	-
	2	もっとじしんを持っているために、お酒を飲みます。たとえばカラオケへ行くとき、これを見えます。	-
	10	日本ではお酒をのむ社会があります。	0
	16	都市でお酒を飲むあとで、人が運転しません。電車がたくさんありますから、べんりです。	+
	4	お酒を飲むのは大事なしゅんかん(custom)です。	-
	11	お酒を飲まない日本人があまりいません。	0
	7	日本に、仕事と自分の生活は mixed-/not separated.	-

	8	仕事のあと、お酒を飲みに行くのはふつうです。	0
	5	お酒を飲み行くの (invitation 誘い) があれば、断るのはだめです。	-
	3	平日なのに、お酒へ飲み行くサラリーマンがたくさん見えます。	-

B の連想語 (留学前)

Cluster	重要度	連想語	
CL1: differences in drinking parties	12	Japanese have different types of drinking parties.	+
	16	Have to distinguish between work and personal life.	0
	18	Drinking parties involve more male people, than female.	0
	6	Drinking is a social act of getting to know people.	+
	13	There are after parties.	+
CL2:Business related drinking parties	5	Doing work involves drinking with colleagues, superiors and clients. It's part of business deals.	-
	15	Drink with colleagues or superiors.	0
	3	Drinking/social meeting a mean to relieve stress.	-
	4	よく仕事のあとに飲みます。	-
	2	よく酒を飲んでいきます。	0
CL3:Decision	8	It is not allowed to not drink at all, but it is allowed to drink slowly.	-
	11	Every one has to know their own drinking limit. It is bad to cause troubles to others.	+
	1	Not allowed to refuse an invite to drink.	-
	14	There are culutural aspect to drinking. E.g., you never fill up your own glass.	+
	7	Everyone knows it's not allowed to drive after drinking.	+
CL4: preferences	9	強いと弱いお酒を飲みます。	0
	10	Different alcoholic drinks.	0
	17	Next morning have hangover.	-

B の連想語 (留学中)

Cluster	重要度	連想語	
CL1:規則	3	日本人はよくお酒を飲みます。	0
	12	飲み会という言葉があります。	0
	6	飲み会の誘わると、断ることはよくないです。	-
	7	飲み会によるときそくがあります。	0
	5	無理やり飲まされてしまうことがあるかもしれない。	-
CL2:いろいろ な飲み会	10	仕事の人とよく飲みます。	0
	11	人によると色々な飲み会があります。(大学の飲み会とか、社会人の飲み会もあります。)	+
	2	飲み会は日本の文化の1つ点です。	+
CL3:理由と 結果	1	酒を飲んで車を運転は危険です。	-/ +

	4	他人に迷惑はよくないです。	-/ +
	8	仕事のストレスを解消する方法です。	0
	9	飲みに行くはよっぱらいになるわけではないです。	+

AとBの留学前・中の連想語は上の通りとなった。以下、連想語を留学前、留学中で比較する。Aの留学前の連想語は“*It's common to drink alcohol after work.*”や“*If people reject an invitation to go out drinking, they will feel bad about it the next day.*”など読解教材で提示された情報が出てくる、または“*It makes me think of going out for birthday and not being able to go to lectures the next day because I was ill.*”のように英国での大学生活の経験に基づく連想語が出てくるが、日本と英国との比較などの相対的な視点はあまり観察されない。一方で、留学中の連想語では、「お酒を飲むイギリス人はとてもうるさいです (loud/rowdy)。お酒を飲む日本人はそんなにうるさくないです。」「イギリスでお酒を買う時、若い人はいつも *Identification* を見せさせています (are made to show I.D.)。」「平日なのに、お酒へ飲み行くサラリーマンがたくさん見えます。」など日本での経験を伴う視点や、日英を相対化する視点が多く見られ、連想語とデンドログラムに基づくインタビューの中でも直接の日本・日本人との心に残る接触体験が語られた。

一方、Bは留学前の連想語でAと同様に読解教材で提示された情報が出てくるが、加えて“*Every one has to know their own drinking limit. It is bad to cause troubles to others.*”“*Everyone knows it's not allowed to drive after drinking.*”などすでに相対化の視点が観察される。留学中の連想語でも「日本人はよくお酒を飲みます。」などAと同様に日本・日本人との直接の接触に基づく連想語が見られるが、留学前と留学中との連想語の傾向にあまり変化が見られない。

留学前・留学中の条件がほぼ同一で、それぞれスタイルは異なるものの日本の情報、日本・日本人へのアクセスも積極的な2名に(1)留学前・留学中とで連想語の傾向の違いが見られ、Aにはダイナミックな変化が観察されるのに対し、BはAほどの大きな変化が観察されない、(2)Bには留学前の連想語にすでに相対化の視点が散見されるということは、発表者らのこれまでの研究事例では初めての事例である。2名の属性における相違は、今回の留学が本人にとって初めての経験か否かという点で、発表者らはこれに着目したい。すなわち、Aは初めての留学である日本での生活から、文化や社会を相対化する視点を獲得しつつ日本・日本人と向き合っているのに対し、Bは英国留学という経験により文化や社会を相対的に捉える視点をもっており、日本留学でもその視点を持ちつつ、日本・日本人と向き合っていると考えられる。

仕事や留学による人の移動がさらに活発化している現在、これからは日本でもBのような交換留学生を多く受け入れることになると考えられ、初めての留学と

いう位置づけで来日する学生と2度目以降の留学という位置づけで来日する学生とでは、日本語教育においても扱う教材や授業運営のしかたも異なる工夫が求められる。今回の研究結果は日本語教育の未来への示唆となる。

引用文献：

- 末田清子（2001）「留学体験の意味付け—大学生の留学前及び帰国後の滞在国に対するイメージ分析を通して—」、シーター・ジャパン『異文化間コミュニケーション』4、57-74.
- 内藤哲雄（2002）『PAC 分析実施法入門 [改訂版] 「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版.
- 姫野伴子・佐藤有紀（2012）「ホームステイ居住学生およびインターナショナル・ハウス居住学生の日本語語彙力調査結果最終報告」『ホームステイの効果に関する研究』報告書（研究代表者 横田雅弘、学校法人明治大学・株式会社 JTB 法人東京産学共同調査研究 2008/10/1-2012/7/31）2012年6月発行、43-68.
- 丸山千歌（2007）「日本語教材の文化トピックからの学習者の発想—学習者とのインタラクションの解明に向けた PAC 分析の可能性—」『日本語教育のフロンティア』くろしお出版、161-184.
- 丸山千歌・小澤伊久美（2008）「PAC 分析におけるフェイスシートの開発に向けた課題：日本語教材と学習者のインタラクションの解明に向けた研究のために」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』15、3-18.
- 丸山千歌・小澤伊久美（2011a）「日本語教科書に見られるステレオタイプを日本語教師はどうとらえたか—多様な日本語学習者への実践経験を持つ日本語教師へのパイロットスタディー」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』18、33-52.
- 丸山千歌・小澤伊久美（2011b）「日本語学習者が読解教材から連想するイメージ—PAC 分析法を活用した留学前・中・後の縦断研究から—」2011年度異文化間教育学会第32回大会、於お茶の水女子大学、2011年6月11日（発表抄録集154-155頁）.
- 丸山千歌・小澤伊久美（2011c）「ステレオタイプの読解教材に学習者の留学経験はいかに反応するか—日本語学習者に対する PAC 分析法による縦断的研究からの示唆—」『日本語教育研究論集』1、華東師範大学出版会、203-213.
- 丸山千歌・小澤伊久美（2012）「日本語教育研究における PAC 分析法を活用した研究の展開」『新時代的世界日本語教育研究』高等教育出版社、146-152.
- ※本発表は、平成 23-25 年度科学研究費補助金(基盤研究(C))「留学経験から発想する日本語授業の新たな意義—PAC 分析法を活用した縦断的研究—」（研究代表

者:丸山千歌、課題番号:23520617)の取り組みの一部である。

ⁱ 本研究は2009年3月から2010年3月にかけてオセアニア地域の交換留学生を対象とした同様の縦断的研究をふまえている。発表者らは、これまでの研究成果から、留学前の日本語学習歴や渡日歴、民族性などの要因が同じでも、ステレオタイプの教材の読み取りは留学することだけでは変わらず、留学中の接触体験の深さと新味が、日本語学習者の批判的な視点を持った、主体的な読みを促す鍵になるという確信を得たので、本研究では、大学3年次に日本語専攻の学生を全員日本に留学させるシステムをもつ英国の大学の学生を対象とすることにした。なお、一連の研究で連想刺激に採用した読み教材が英語圏の学習者対象の日本語中級教科書であったので、英語圏の日本学習者に調査協力を依頼している。

ⁱⁱ 2005年5月27日異文化間教育学会プレセミナーでの講義(講師:井上孝代・末田清子・伊藤武彦)に基づく。

ⁱⁱⁱ インタビューの手順を要約すると以下のようになる。(1)テキストが与えられる。日本語の教科書に掲載されている読み物を読む。読み物の日本語のレベルは中級前半で、簡単な語彙リストが付されている。(2)連想刺激文が紙面とともに、調査者により口頭でも与えられる。(3)思いつくままに連想したことばを、1語ずつ1枚のカードに書く。A4を16等分したサイズの紙を用意し、枚数は制限しない。(4)カードを重要な順に並べる。想起順になっている(3)のカードを、重要度順に並べ替える。(5)カードの組み合わせのイメージの近さを直感的に7段階で評価する。カードを2枚ずつ選び、各ペアの類似度を「非常に近い①」から「非常に遠い⑦」までの7段階で、直感的なイメージで、評価を行う。(6)休憩に入る。調査協力者は休憩し、フェイスシートを記入する。その間、調査実施者(筆者)は(5)の情報(連想項目間の類似度距離行列)をコンピューターに入力し、デンドログラムを作成する。デンドログラム(樹形図)は、(5)で得られた類似度距離行列(参考資料1・2)に基づき、筆者らがウォード法でクラスター分析を行った結果、析出されたものである。ソフトはSPSSを使用した。(7)デンドログラムに基づいたインタビューを受ける。休憩中に作成されたデンドログラム見ながら、インタビューを受ける。主に、まとまりを持つクラスターとして解釈できそうなグループを調査協力者が提示し、まとまりだと思ふ理由やクラスター間の関係、各項目のイメージなどを質問に答える形で説明する。(8)各連想項目のイメージ(プラスかマイナスか)を評価する。各連想項目の単独のイメージが直感的にプラス(+)、マイナス(-)、どちらともいえない(0)のいずれに該当するかを答える。

^{iv} 本調査で採用した「酒」(石川ほか1993)の本文を以下に記す。(紙幅により段落ツメ)

我々の生活の節目には、必ずといっていいほど酒が登場する。「新年会」から「忘年会」まで一年中何かと酒を飲む機会が多い。「つきあい酒」といって、仕事が終わったあと、遅くまで職場の人たちと酒を飲むこともある。こうした酒は、人間関係を確認する手段にもなり、「飲みに行きましょう。」と誘われると、断るわけにもいかない。飲みたくなくても、無理やり飲まされてしまうこともあるかもしれない。しかし、いっしょに酒を飲むことで、仕事のストレスを解消することもできるし、職場では見られないその人の一面を発見することもあろう。昔から「酒の席は無礼講」と言われ、酒の上のできごとは、大目に見られることが多い。しかし、いくら酒に酔っていても、他人に迷惑をかけるのは、いいことではない。特に酒を飲んで車を運転すれば、危険なことは、だれでも知っているはずだ。「飲んだら、乗るな。乗るなら、飲むな。」という標語を忘れてはなるまい。また、飲み過ぎると、次の朝は頭痛がしたり、吐き気がしたりすることがある。酒の誘いを断ると、つきあいが悪いと思われがちだが、最近の若い人の中では、仕事と自分の生活をはっきり区別して、「つきあい酒」につきあう人が減少する傾向がある。